

## 文学の一兵卒

——太宰治「散華」について

北 川 透

一九九一年に現代詩の世界では、〈湾岸戦争詩論争〉というものが起こった。主として湾岸戦争をモチーフとする詩を積極的に書いた藤井貞和と、それを批判する瀬尾育生との間で交わされた論争である。その背景には、「鳩よ!」一九九一年五月号の、湾岸戦争をめぐる詩の特集「湾岸の海の神へ」や、文学者の〈反戦声明〉<sup>※</sup>などがあり、それらを視野に含んで論争は展開するが、わたしはこれらには深くかかわらなかつた。

ただ、わたしは二つ、三つ書いたエッセイ<sup>※</sup>で、必ずしも藤井貞和が張った論理に対してではなく、その詩を高く評価する立場をとった。反戦の理念やマスコミなどによって与えられる共通イメージに依拠するのではなく、個人の内的なモチーフによって書かれているならば、〈戦争詩〉は抑圧されるべきではない、と思つたのである。なぜなら、それは〈戦争詩〉あるいは〈反戦詩〉を仮装しているかも知れないが、実際は括弧付ではない、現代の詩にほかならないからである。

実は、その思いの底には、かつての〈大東亜戦争〉下の詩や文学についての、これまでの戦争協力か反戦かに二分する評価について

の疑問が、かねてよりわたしの中に生まれていたということがあった。詩人や小説家が、自分の内的モチーフに従うなら、ただ、単に時局に便乗し、戦争に迎合できるはずはないし、また、その反対の理念に行き着くはずもない。戦争という外部に深くかわりながら、いや、かわるからこそ、自らの内的な契機を際立たせざるをえない。そこにこそ詩の自由は試されるのである。その頃まだ、わたしのなかで十分な輪郭をもっていなかつたが、それは主として戦争下の太宰治の文学の在り方が拠り所になるはずであつた。そして、わたしが驚いたのは、その湾岸戦争に触発されて書かれた藤井の詩が、大東亜戦争下の太宰治の小説を孕んで浮上していたからである。彼の「<sup>※</sup>自分も死にます、この戦争のために、と」という詩がそれであつた。

お元気ですか。

ここに手紙があります。

これを太宰治は、

「散華」という小説に仕立てて、

3 回引いています。短い小説のなかに、短い小説なのに。

その手紙には、

「遠い空からお伺いします。

無事、任地に着きました。

大いなる文学のために、

死んで下さい。

自分も死にます、

この戦争のために。」

と書かれてあります。

(一、二連のみ)

この藤井の詩は、戦争末期の昭和十九（一九四四）年に発表された「散華」という小説を、わたしに鮮烈に思い起させた。これは太宰治研究者がこれまでほとんど問題にしてこなかった作品だが、わたし自身も、当時、戦争下の太宰を問題にしようと思いつながら、この作品に、あまり注意していなかったのである。それに引き換え、〈戦争詩〉を書こうとして、「散華」を引いてくる、藤井のひらめきのよさに、わたしは驚嘆せざるをえなかった。それとともに、その時はよくわからなかったが、藤井の詩にもどこかずれを感じた。わたし自身、「散華」を繰り返し読んでいるいまから考えると、それはどうも「散華」という小説の受け取り方、読み方の違いに根ざしているのではないか、と思う。

ところでまず、この小説の題名が、なぜ、「散華」かということ

である。作家は冒頭でそれに触れ、《玉砕といふ題にするつもりで原稿用紙に、玉砕と書いてみたが、それはあまりに美しい言葉で、私の下手な小説の題などには、もったいない気がして来て、玉砕の文字を消し、題を散華と改めた。》と書いている。むろん、わたしたちは戦争下の太宰の作品すべてがそうであるように、これも一つの作品に対する仕掛けであって、この自己言及を文字通りに受け取ることは出来ない。いったい、「玉砕」と「散華」とを並べて、どちらが美しいかを、決める基準などというものがあるのだろうか。たしかに《玉砕》は、《神国日本》の大義に殉じて、美しい玉のようにいさぎよく砕け散る、という意味の《美しい言葉》であった。しかし、それは単に《美しい言葉》ではない。この作品の背景をなしている、アツツ島の日本軍が、後方支援も撤退する方法もなく、見殺しにされて全滅したこと、つまり統帥部の無能を、大本営が隠蔽するために用いた《美しい言葉》なのであった。そして、ジャーナリズムはこれを踏襲し、増幅し、アツツ島玉砕から始まって、マキン島の玉砕、トラフ島の玉砕、サイパン島の玉砕、テナアン島の玉砕、グアム島の玉砕、そして、遂に硫黄島の玉砕に至る日本軍守備隊の全滅を、このことばで美化し続けたのであった。当時、詩人として全存在を賭け、《総力戦》下の世論を嚮導していた高村光太郎が、「五月二十九日の事」という詩において、大本営発表のアツツ島《全員玉砕》を受けた前詞から書きはじめたのは、また、当然のことであった。

昭和十八年六月一日作。五月卅日十七時の大本営発表により、ア

ツツ島守備部隊の全員玉砕を知る。「……五月廿九日夜敵主力部隊に対し最後の鉄槌を下し皇軍の神髄を發揮せんと決意し全力を挙げて壮烈なる攻撃を敢行せり。爾後通信全く途絶全員玉砕せるものと認む。傷病者にして攻撃に参加せざる者は之に先だち悉く自決せり……。」〔五月二十九日の事〕前詞

ここに引用されている大本営発表に基づいて、翌五月三十一日の各社の新聞の見出しに、大きく「玉砕」ということばが踊ったのは言うまでもない。例えばこの日の「朝日新聞」朝刊のトップは、「山崎部隊長ら全將兵／壮絶夜襲を敢行玉砕」であり、「読売報知」は「アツツ島の我守備部隊／二千数百名全員玉砕す」と報じたのであった。この直後の六月一日に作られ、ラジオ放送された高村光太郎の詩は、先にも述べたように、前詞で受けた「玉砕」という「美しい言葉」の意味を、ジャーナリズムの文脈ではなく、詩のそれとして最大限に宣揚することから始まっていた。

もとより武士のあはれを知らぬ彼等の眼にはただ日本軍全滅すとのみ映じたのだ。皇軍二千余人悉く北洋の孤島に戦死す。この悲愴の事実を直視して

その神の如き武人の心にわれらは哭く。  
われらは哭く、われらは哭く。  
日本全国民、眼を閉ぢて哭く。  
その死の事実の故のみならず、

文学の一兵卒 —— 太宰治「散華」について

その死を潔しとした二千余人の心に哭く。  
清さ、高さ、ありがたさに胸が裂けるのだ。

〔五月二十九日の事〕

これによれば、「玉砕」とは、単に「日本軍全滅す」ではないのである。それは「武士のあはれ」に訴え、「神の如き武人の心」の「清さ、高さ、ありがたさ」に全身で感傷し、彼等のたぐいまれな「勇猛心」を讃え、すべてを「人意のはからひ」を越えた「神の御心」に帰し、極らない「美」のうちに昇華させることでしか完結しえないものなのである。ここで詩に負荷されているのは、神がかり的な煽情性であろう。

では、太宰治が「玉砕」ということばを避けて、その代わりに用いた「散華」には、そのような煽情性はないのだろうか。もともとこのことばは『無量寿経』などに見られる仏教用語であり、花をまいて仏を供養する、という意味である。後に蓮の花の形をした紙の華をまき散らす法要を指すことになった。おそらくそれが変化して、戦死を花の散る美しさに例えることばになったのであろう。戦死の美化という点では、「玉砕」と共通性があるが、玉が砕けるといふような激しさが無い。それに「散華」は仏教語ということの上に、個人的なニュアンスもあつて、神がかり的な意味に耐えられない。「日本軍玉砕」とは言いえても、「日本軍散華」という語法は成り立たないのである。そうであれば、当然、この語は大本営発表に登場しえない。ただ、新聞報道で一つ見いだしたのは、昭和十八年六月一日付けの「朝日新聞」における第三面の「心うつ最後の逆襲」散華まで烈々の攻勢」という見出しである。ここで「散華」が用い

られたのは、アツツ島守備隊の山崎部隊長という個人が記事の対象になつてゐるからだ、と思われ。

戦争詩の領域では、それを量産した高村光太郎も三好達治も、作品中に《散華》という語を使つたことがない。櫻本富雄の『詩人と責任』の第十章「言語遊戯―軍神部隊と玉砕」は、アツツ島玉砕を扱つた詩歌二十数篇が集められている。当然、そこに《玉砕》の語が多く出てくるが、《散華》の用例は皆無である。むろん、太宰はこうしたことをすべて踏まえて、《散華》を小説の題名に選んでゐるわけではないだろう。しかし、同じ《美しい言葉》にしても、時代の匂いを鋭く嗅ぎ分ける太宰の言語感覚は、結果として、統帥部の作戦の失敗による守備隊全員の見殺しを隠蔽するために、戦死を神がかり的に美化することばとして使われた《玉砕》を、小説の題名としては避けえたのである。そして、非煽情的で聖戦下のジャーナリズムのことばになりにくい、より個人的なことばである《散華》を選んだことになる。しかも、この題名の選択は作品の構成や主題と深くかかわつてゐるのであつて、そもそもこれは、《玉砕》という題では成り立たない作品なのである。

それはこの小説の扱つてゐる死者が、アツツ島で戦死した若い友人三井君ばかりではないことに依つてゐる。もう一人、肺結核で病死した三井君のことが、まず、初めに書かれてゐる。三井君も三井君も二十六、七歳という設定である。三井君は小説を書いて、作家である《私》に見てもらつてゐる。しかし、三井君の小説は《ところどころ澄んで美しかった》が、《背骨を忘れてゐる》ようなところが、《私》に死ぬまで一度もほめられなかつた。病状が進んで、

《私》のところへ来なくなつて、三ヶ月か四ヶ月後に死んだが、親友の証言では、三井君はもともと疾患を直す気がなく、母の眼を盗んで《病床から抜け出し、巷を歩き、おしるこなど食べて、夜おそく帰宅する》ことがしばしばあり、それは死の二、三日前まで続いたのだ、という。ここまではこの戦争で従軍も出来ず、病床で死ぬほかない若者が《あはれである》という、いわば世間の常識に従つた描き方である。しかし、作家の筆は三井君の臨終を描くところから、突然、異様なほど高調して、その《比類が無い》美しさを描こうとする。

三井君は寝ながら、枕頭のお針仕事をしていらつしやる御母堂を相手に、しづかに世間話をしてゐた。ふと口を噤んだ。それきりだつたのである。うらうらと晴れて、まつたく少しも風の無い春の日に、それでも、櫻の花自身の重さに堪へかねるのか、おのづから、ざつとこぼれるやうに散つて、小さい花吹雪を現出させる事がある。机上のコップに投げ入れて置いた薔薇の大輪が、深夜、くだけるやうに、ばらりと落ち散る事がある。風のせみではない。おのづから散るのである。天地の溜息と共に散るのである。空を飛ぶ神の白絹の御衣のお裾に触れて散るのである。私は三井君を、神のよほどの寵児だつたのではなからうかと思つた。……人間の最高の栄冠は、美しい臨終以外のものではないと思つた。

(《散華》)

わたしたちがこれから異様な印象受けるのは、三井君の死の何でもない日常性と、それを花吹雪や薔薇の大輪の落ち散る、まさしく

《散華》のイメージ(幻想)として描きだす、その落差の大きさによつてである。考えようによつては、三井君は下手な小説しか書けない文学青年で、しかも、この《非常時》に労働者として生産活動にも従事できないのに、真面目に闘病生活もしないで、みずからの死期を早めているような人である。ありていに言えば、彼は《総力戦》のイデオロギーの下では、《非国民》扱いされかねない、負の価値を背負わされている。それが《美しい臨終》を迎えた神の寵児として描かれるのだから、異様に見えないわけがない。つまり、昭和十九年という時代に三井君の病死を、美しい《散華》として描き出すことは、ほとんどフィクションである。

小説をことさらフィクションだというのは変だが、それはこれがいかに私小説風に書かれているからそういうのではない。先にも触れたように、ここには一人の死者が描かれている。もう一人のアツツ島の戦死者、当時のことばで言えば、神の御柱として《玉碎》した、三田(循司)君の公の死と三井君の単に個人的な病死を、同列に《散華》のイメージで描くことが、当時の価値観から言えばありえないようなことではないのか、ということに注意したのである。もし、太宰が時代に同調したい、あるいは迎合したいのなら、三井君のことなど書かないで、三田君のことだけ書けばよかつた。そして、太宰には三田君については書く私的な理由もあつた。三田循司に同じ名前のモデルがいて、彼が太宰と交渉があつたことは、やはり実名でこの小説に登場する戸石泰一が、『散華』の頃」という回想で書いている。

「散華」の主人公、三田循司は、作品にあるように、岩手県花巻の生れ、私の一級上で、昭和十四年仙台の二高から東大國文に進み、詩を書くこととしていた。

……中略……

ところで、三田は一凶な、はげしい所のある男だつた。その頃、私たちの間でよく使われた言葉を使うと、「純粹」そのもののような男であつた。そのような、彼の氣質のせいだったのかもしれない。彼は、三年になると、急速に、太宰さんよりは、むしろ太宰さんを通じて紹介された、山岸外史さんに傾倒していつた。

……中略……

ストイックな一凶なところのある三田は、兵隊にいつても、とうとう幹部候補生の試験をうけなかつた。反戦的というよりは、むしろ「一兵卒として殉ずる」という彼らしい「義」(またはロマンチズムといつてもいい)を貫ぬこうとしたのである。そして、その、幹部候補生に落ちたために、彼はアツツ島に行かされ「玉碎」させられた。

(「散華」の頃)

これで見ると、小説「散華」の三田君は、モデルの三田循司の事実性、人柄に、かなり依拠していることが分かる。そのことに移る前に、わたしの疑問を書いておくと、いつたい病死する三井君には三田君のようなモデルがあるのだろうか、ということである。それといつても、三井君には戸石泰一のような証言がないからだ。この頃三鷹の太宰の家に数人の大学生が遊びに来ていたことは、「新郎」などでも触れられている。だから、別に証言がなくても、三井君のような学生がいることに不自然さはない。しかし、わたしがそのモ

デルの實在を疑問に思うのは、三井君には三田君に付与されているような、出身地(あるいは居住地)、進学した高校や大学名、性格、風貌などの具体性が欠けているからである。そして、もつと言え、その具体性や現実的な属性が欠けているからこそ、三井君の病死は、先に見たように異様なほど美化できたのではないだろうか、と疑うことができる。

むろん、現段階で実証できないのに、モデルがいないと決め付けるわけにはいかない。わたしがそんな仮説を提示してみたいのは、太宰が小説の構成上、なぜ、アツツ島玉砕の三田君について書こうとしたとして、彼の知人でも友人でもなく、戦争の死とは何の関係もない三井君の《散華》を必要としたのか、ということを考えているからである。その問いを見失わないように、次に三田君がどう描かれていたのかを見ていかなければならない。まず、三田君の特徴が、先の証言者である戸石君との比較で描かれていることに気づく。二人はたいしてセットとして登場するが、戸石君がもっぱら聞き役、それも愚問を連発して《私》にからかわれる道化役であり、見かけは自惚れ屋の陽気な美男子ということになっている。

それに対して、三田君は地味な性格で、丸坊主、鉄縁の眼鏡、《頭が大きく、額が出張つて、眼の光りも強くて、俗にいふ「哲学者のやうな」風貌》だという。自分からすすんでもものは言わないが、《私》の話を理解するのは早い。《私》から真面目過ぎるのを注意されると、《私》の所へは来なくなる。それは先の回想でモデルの戸石泰一が《純粹》過ぎる氣質と評していることと対応しているが、《私》はどちらかと言うと、三田君よりも戸石君の方に、同情や親

和を感じている叙述になっていることにも注意したい。三田君はその後、病気で入院したりしたが、丈夫になってからは、熱心に詩の勉強をはじめ、《私》の先輩である山岸さんの所に入入りするようになる。山岸さんも戸石君も三田君の詩を高く評価するが、《私》はそんなに感心しない。そのうちに三田君は出征してしまうのである。

小説はこの後、出征した三田君からの便りの紹介という形をとって進行する。最初の便りは、《太宰さん、お元気ですか。／何も考へ浮びません。／無心に流れて、／さうして、／軍人第一年生。／当分、／「詩」は、／頭の中に、／うごきませんやうです。／東京の空は?》というように、分ち書きになっている。《私》はこの便りに不満である。《たゞたどしい、甘えてある》調子、《正直無類のやはらかな心情が、あんまり、あらはに出てゐる》こと、《私》はこのような《うぶなお便りを愛する事が出来なかつた》のである。

この後も、苦しみが沈潜しているようなのが、《可憐なお便り》など《純粹な衝動が無ければ、一行の文章も書けない所謂「詩人氣質」》が出てくる手紙が来る。この《純粹》や《詩人氣質》の指摘には、いくらか《私》の揶揄の気持ちが含まれているだろう。《私》は三田君がアツツ島で《玉砕》した後、遺稿詩集の計画が立てられた時点になつても、なお、書かれた詩への評価を変えない。

しかし、《私》はそのような便りを紹介したくて、この小説に取りかかったのではなく、《私》の意図は、《最後の一通を受け取ったときの感動を書きたかつた》とされる。その《最後の一通》とは、最初に藤井貞和の詩とともに引用した、あの《大いなる文学のため

に、／死んで下さい。／自分も死にます、／この戦争のために。』  
という文意を含んだ手紙である。しかも、そこで強調されているこ  
とは、その便りを受け取った時、〈私〉は三田君がアツツ島守備部  
隊に属していることを知らないし、従つて彼の〈玉碎〉を予感する  
はずもなかった、ということである。つまり、手紙の文面だけから、  
〈私〉は感動を受け取った、というのである。その感動の強さは、  
彼の詩を評価できなかった自分の不明を謝したい、と思うほどだつ  
た。〈私〉は次のように語る。

うれしかつた。よく言つてくれたと思つた。大出来の言葉だと  
思つた。戦地へ行つてゐるたくさんの友人たちから、いろいろと、  
もつたないお便りをいただくが、私に「死んで下さい」とため  
らはず自然に言つてくれたのは、三田君ひとりである。なかなか  
言へない言葉である。こんなに自然な調子で、それを言へるとは、  
三田君もつひに一流の詩人の資格を得たと思つた。

〈私〉は三田君が《大いなる文学のために》死んで下さい」と、  
言つてくれたのが気に入つてゐるのである。こんなに自然な調子で、  
三田君が言えたところに、〈私〉は《一流の詩人の資格》を見ている。  
この《一流の詩人の資格》とは何なのだろうか。まだ、この時点で  
〈私〉は彼がアツツ島で《玉碎》する（した）の知らないが、と  
もかく手紙が戦地から来たことははっきりしている。それは〈私〉  
に対して、あなたの戦場は（自分たちと違つて）文学以外にないこ  
とを告げているのである。《総力戦》という絶望的な戦局のなかで、

文学の一兵卒 —— 太宰治「散華」について

兵士が戦場での死を宿命づけられておられたら、作家（詩人）は  
それと同じ位相で《大いなる文学のために》死ぬ他ない。この手紙  
はそんな透徹した認識を語っている。〈私〉はそれが《一流の詩人  
の資格》に見えたのである。そして、三田君の詩は、兵士としての  
自らの宿命に従つて（それが〈私〉のいう《別の形》ということだ  
が）アツツ島における《玉碎》という形で完成する。だからこそ、  
〈私〉は次のように述べる。

繰り返し繰り返し読んでゐるうちに、私にはこの三田君の短い  
お便りが実に最高の詩のやうな気さへして来たのである。アツツ  
玉碎の報を聞かずとも、私はこのお便りだけで、この年少の友人  
を心から尊敬する事が出来たのである。純粹の献身を、人の世の  
最も美しいものとしてあこがれ努力してゐるコトに於いては、兵  
士も、また詩人も、あるひは私のやうな巷の作家も、違つたとこ  
ろは無いのである。

〈私〉は三田君が《任地に第一歩を印した時から、すでに死ぬる  
覚悟を》、《自己のために死ぬるのではない。崇高な献身の覚悟》をし  
ていたことに気づく。彼の手紙は、その覚悟から出てきていたので  
ある。そして、これの眼目は、兵士も詩人も、また、巷の作家も、  
それぞれの戦場における、この《純粹の献身》の覚悟には、《違つ  
たところは無い》と、言うところにある。

先にも述べたように、この「散華」に言及している研究は、ほと  
んど無いと言つていいほど僅かだが、その内の一つ、松本健一の「太

「宰治とその時代」<sup>※</sup>には、十行ほど触れた部分がある。その中で松本は太宰が《散華》という、戦争死の美学をきわめた言葉をつかいないながらも、それを「大いなる文学のために」死ぬことと、等価にみなそうと述べている、と述べている。《散華》が戦死の美学をきわめたことばかどうかは、ここでわたしが《玉碎》との関係で述べているように、疑問に付されねばならぬが、戦死と文学の死が等価になつてゐる、とは言えるだろう。しかし、等価ということを書いたのだつたら、もう一つ重要な関係を逸することはできない。そのことを指摘している殆ど唯一の論は、鳥居邦朗の「昭和十九年（評伝）<sup>※</sup>」である。

玉碎した「三田君」について語る前に、肺結核で死んだ「三井君」の死の美しさをこのようにめんめんと言ふ意図は何なのか。少なくとも二人の死が等価のものとして並べられていることは確かである。それが美しき死として等価であるということは確かである。それが美しき死として等価であるということは、玉碎死と病死との間に差はないということである。その基準はどうやら世俗のそれとは遠いところにあるらしい。（昭和十九年）

《億兆一心、国家ノ総力ヲ挙ゲテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ違算ナカランコトヲ期セヨ》（十二月八日「宣戦の大詔」<sup>※10</sup>）という、《総力戦》下の国家が掲げる至上価値は単なる世俗のそれではない。それは翼賛イデオロギーによつて、個人の内面の価値まで支配する強力である。<sup>※11</sup>その強力の支配下において、あくまで私的な病死と、《玉

碎》ということばが象徴する、神の御柱としての公の死が、等価として通用するはずがない。「散華」がそれを等価として描いておれば、これほど危険なことはない。なぜなら、《玉碎》は病死によつて相対化され、その神の柱としての絶対性が奪われてしまふからだ。

しかし、当時、「散華」からその危険性が見えなかつた理由の一つは、太宰治がおそらく内部に用意した周到な仕掛けにある。それは三井君の《美しい臨終》を、《空を飛ぶ神の白絹の御衣のお裾に触れて散る》イメージにおいて、徹底的に美化したということである。このようにして、三井君を《神のよほどの寵兒》にまで高めることによつて、《総力戦》に翼賛する世間の眼をくらし、三田君の神の御柱は相対化されることになつたのである。実際、山岸さんへの手紙に、《私》は《三田君がアツツ玉碎の神の一柱であつた事を、ただいま新聞で知りました》というように書いても、その後、三田君がことさら神聖化されるようなことはない。それどころか、そもそも不思議なことに、ここには《玉碎》のこと自体が、ほとんど何も語られていないのである。

たとえば先の高村光太郎「五月二十九日の事」や、三好達治の「あだ一歩近く来れり」には、アツツ島における戦闘の描写がある。斎藤茂吉の短歌「神の御軍」には悲しさのあまりの《わが雄たけび》がある。佐藤春夫の詩「軍神山崎部隊長の頌」には《悠久の大義》に生きた《大丈夫の鑑》への頌歌がある。土屋文明の短歌には《神の国あきつ島に一致団結》を呼び掛ける《君がこゑ》がある。蔵原伸二郎の詩「湿原の忠霊」には《一億の臣民みな死してのち止む！》



憤怒がある。佐佐木信綱の「讚アツツ嶋将士歌」には《頑狡あめりか奴》に対する敵討の誓いがある。丸山薫の詩「ああ アツツ島」には《太平洋の地図をひろげ／カムチャツカの東 アツツ島》を見ている涙で濡れた瞳がある。深尾須磨子の詩「大和の母を讀へて」には、《玉と砕けて護国の鬼となる／わがいとし子の栄えをこそ》願っている母の心がうたわれている。

しかし、太宰の「散華」には、これらの一切がない。そのことにわたしたちは、もつと虚心に驚いてもよいのではないだろうか。そして、そのかわりに、先には藤井貞和の詩とともに紹介した、三田君の次の手紙が三回も引用されている。

御元氣ですか。

遠い空から御伺ひします。

無事、任地に着きました。

大いなる文学のために、

死んで下さい。

自分も死にます、

この戦争のために。

《私》はこれを三田君の最高の詩だと思っている。だから三田君の遺稿集の計画が持ち上がると、《私》はそこに下手な詩を載せることに賛成しないが、《開卷第一頁に、三田君のあの便りを、大きい活字で組んで載せてもらひ》たい、と願う。

なぜ、《私》はこの短い手紙に、これほど思い入れをするのだら

うか。それに実在する三田君が、小説に書かれているように、本当にこんな手紙を寄越したのだろうか。これを私小説だと決めてかかれば、実在の手紙を予想するほかない。しかし、わたしはその前提を取らないから、似たような手紙はあったとしても、その趣意は太宰の創作なのではないか、と疑っている。先にわたしは三井君の實在を疑ったが、それは小説の内的な構成として見ると、三井君の《散華》は、三田君の《玉砕》を相対化する装置になっているからである。今度もまた三田君の手紙の實在を疑いたくなるのは、先の松本健一が言うように、そこでは戦争のための死と、文学のための死が等価になっているからである。そして、むしろその文意のなかに隠されているのは、戦争のためではなく、自分は《大いなる文学のために》死にたい、という太宰自身のメッセージである。

では、その《大いなる文学のために》死ぬとは、どういうことなのか。つまり、文学者が戦場で銃を取って死んだとしても、彼が《大いなる文学》を作らなければ、それは文学者としての宿命に死んだことにならない。そして、文学のための死が兵士の死よりも、価値があるわけではないように、兵士が戦場で死んでも、それは文学のための死よりも価値がある、というわけでもない。ましてや彼の作った下手な詩が、それで救出されることなどありえない。こういう関係に両者があるというところが等価だ、ということである。こうして誰も避けることは出来ない宿命としての死に、位階のあるはずはなく、国家が死者をランク付けして授ける勲章に意味を見いだすことはできない、ということだろう。作家である《私》も、一兵士の三田君も、戦争下において、そのような避けられない死に直面してい

たのである。

これはいわゆる「支那事変」以降の小林秀雄が、「戦争について」<sup>※12</sup>や「文学と自分」<sup>※13</sup>などの文章で、考えたことと通じているだろう。前者は蘆溝橋事変の起こった後の昭和十二年に発表された文章であり、後者は昭和十五年に、「文芸戦後運動」のなかでした講演「文学と自分」を文章化したものである。「戦争について」から。

戦争に対する文学者としての覚悟を、或る雑誌から問はれた。僕には戦争に対する文学者の覚悟といふ様な特別な覚悟を考へる事が出来ない。銃を取らねばならぬ時が来たら、喜んで国の為に死ぬであらう。僕にはこれ以上の覚悟が考へられないし、又必要だとも思はない。一体文学者として銃をとるなどといふ事がそもそも意味をなさない。誰だつて戦ふ時は兵の身分で戦ふのである。文学は平和の為にあるのであつて戦争の為にあるのではない。文学者は平和に対してはどんな複雑な態度でもとる事が出来るが、戦争の渦中にあつては、たつた一つの態度しかとる事は出来ない。戦ひは勝たねばならぬ。そして戦ひは勝たねばならぬといふ様な理論が、文学理論の何処を捜しても見付からぬ事に気が付いたら、さつさと文学なぞ止めて了へばよいのである。

(「戦争について」)

戦争下の小林はこの考えを終始変えなかつた。言うまでもなくあくまで勝たねばならぬ戦争の論理と、平和の為にこそある文学の論理を、火と水のように峻別している。もし、戦いは勝たねばならぬ

という理論を、文学のなかに捜さねばならない事態になると、いわゆる括弧付きの「戦争文学」や、「愛国文学」が氾濫する。しかし、小林はそんなものを書くのではなく、「文学など止めて了へばよい」というのだろう。先輩の文芸評論家である小林のこれらの文章を、太宰が読んでいなかったとは想像しにくい。そして、似たような論理を生きた太宰が、これに少なからず共感したことは疑いない。

しかし、小林の論理が「一文学者としては、飽くまでも文学は平和の仕事である事を信じてゐる」が、「時到了れば喜んで一兵卒として戦ふ」というように、一兵卒にウエイトが置かれるのに対して、太宰の態度は微妙に違つていた、と思う。たぶん、彼は「時到了れば喜んで一兵卒として戦ふ」人間に対する共感があつても、自分自身はそんな立派な感情や覚悟を持つことが出来ない。「散華」のなかの「私」が親和感を抱くのは、真面目で純粋な三田君ではなく、トントンカンな道化役を演じる戸石君だつたことを思い起こすべきだろう。「私」が生きられるのは、あくまで文学の中の一兵卒なのである。

むろん、それは太宰にとつても当てはまることだろう。どんなに戦争は勝たねばならぬ、という政治の論理しか通用しないシチュエーションにならうが、文学の論理に固執する以外に、彼には生きる術がない。まさしくこの「散華」を書いた時期こそは、仙台時代の魯迅をモデルにした長編小説『惜別』を準備し始めた頃なのである。そして、この小説は戦争に対しても、平和に対しても、限りなく「複雑な態度」をとり続けることでしか成立しえなかつたのである。<sup>※14</sup>そうすることが「大いなる文学のために、／死んで下さい。」

という、三田君の声とも、〈私〉の内心の声とも分かたぬ、遙かなる空から届けられたことばに、彼が殉じることだった。

〔註記〕

※1この論争について、全体の輪郭を描きながら、その意味を論じているものに、坪井秀人『声の祝祭』（名古屋大学出版会）所収「第十五章何もしいよりずっと……」がある。

※2北川透「戦争詩を〈おいしく〉書く方法」（『現代詩手帖』一九九一年七月号）、「〈文字〉と〈声〉の間」（『現代詩手帖』一九九一年十二月号）その他。

※3この詩の初出は、「文芸」（一九九一年四月）であるが、ここでは藤井貞和『湾岸戦争論』（河出書房新社）に収録されているものから引いた。

※4藤井貞和が「散華」を私小説と受け取っているらしいことと、反戦声明を出すことに意義を認めていることへの、わたしの違和を指す。

※5ここでの高村光太郎からの引用はすべて『高村光太郎全詩集』（新潮社）に依る。

※6櫻本富雄『詩人と責任（統詩人と戦争）』（小林印刷株式会社出版部）。なお、この論でのアツ島玉砕にかかわる詩の多くは、この書に収められている資料に依る。

※7戸石泰一「『散華』の頃」は、『定本太宰治全集6』の別刷り葉に載っている。

※8松本健一『太宰治とその時代』（第三文明社）の七章へ。

文学の一兵卒 —— 太宰治「散華」について

※9鳥居邦朗「昭和十九年（評伝）」（『解釈と鑑賞』一九九三年六月号）

※10「朝日新聞」昭和十六年十二月八日付け夕刊より。

※11北川透「戦争下の文学」（岩波講座『日本文学史』第十三巻）

参照。

※12小林秀雄「戦争について」（『改造』昭和十二年十一月号）

※13小林秀雄「文学と自分」（『中央公論』昭和十五年十一月号）

※14北川透「花なき薔薇——太宰治「惜別」論」（梅光女学院大学講座論集『太宰治を読む』に収録の予定）